

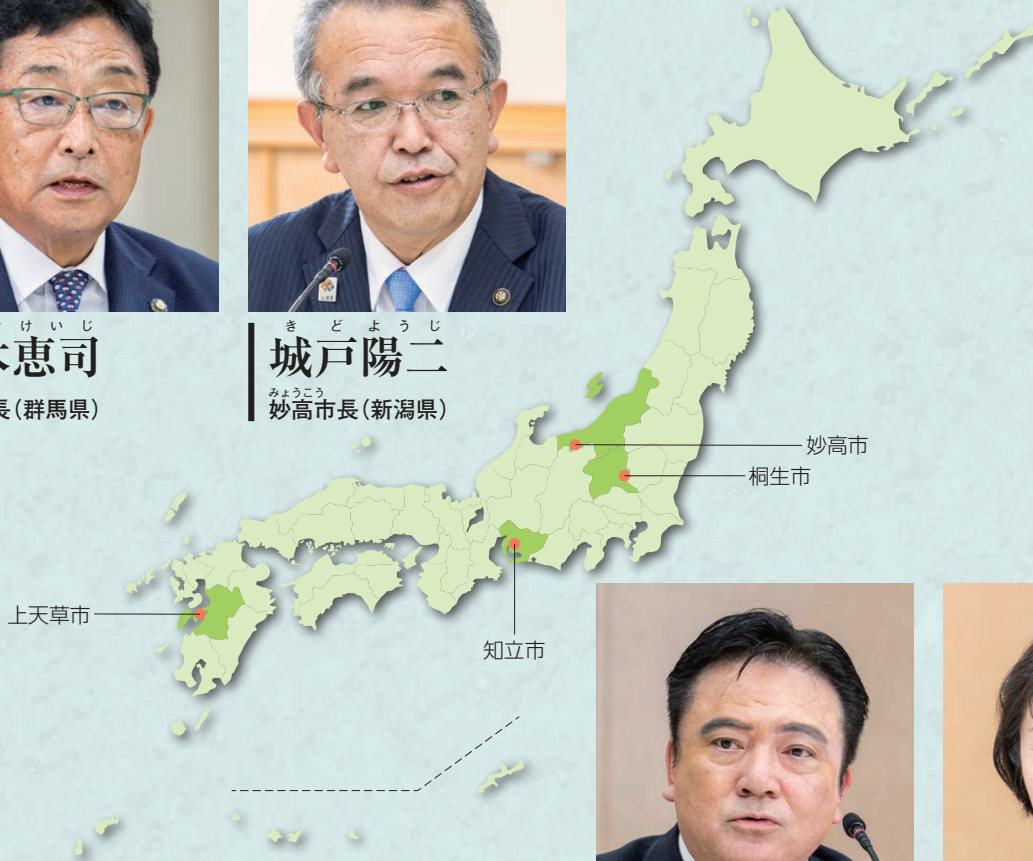
# わがまちのSDGs



あらきけいじ  
**荒木恵司**  
きりゆう  
桐生市長(群馬県)



きどようじ  
**城戸陽二**  
みょうこう  
妙高市長(新潟県)



司会・コーディネーター

ほそかわ たまお  
**細川 珠生**

政治ジャーナリスト



ほりえたかおみ  
**堀江隆臣**

かみあまくさ  
上天草市長(熊本県)



いしかわともこ  
**石川智子**

ちりゅう  
知立市長(愛知県)

2015年9月の国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）。世界が直面する諸問題の解決を目指し、持続可能な社会をつくるために、2030年までに達成を目指す世界共通の目標（17のゴール・169のターゲット）から構成）で、日本の自治体においても活発に取り組みが行われています。特に、平成30年度に「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」が制度化されたことなどもあり、近年、SDGsの理念に沿いながら、地域を挙げて地方創生に関する施策を進める「地方創生SDGs」に取り組む自治体は増えています。

座談会では「SDGs未来都市」の選定を受け、活発にSDGsの取り組みを進めている城戸・妙高市長、荒木・桐生市長、石川・知立市長、堀江・上天草市長にお集まりいただき、各都市の取り組みの内容、市民への啓発の重要性、現時点の課題、今後の展望などについて、幅広く語っていただきました。

（本文中の役職名・敬称は一部省略しています）

各地で進む、持続可能なまちづくり

**細川** まずは、SDGsに関する施策を進めることになった背景やきっかけなども交えながら、各市の取り組み内容についてお話しいただきたいと思っています。

**城戸** 妙高市は、平成17年に1市1町1村の合併で誕生しました。そのときに掲げた新市の基本理念が「生命地域の創造」です。妙高市では、



この理念を基に、人と自然が共生する持続可能なまちづくりを推進してきました。この生命地域の取り組みを再設計しながら、さらに持続可能な地域社会の形成を進めようと、「SDGs未来都市」の提案募集に応じた結果、令和3年に「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」の選定を受けることができました。

それ以来、国立公園がある自然環境を軸として、市民や観光客などに利便性と満足度の高いサービスを再設計し、提供する「みんなでつくる生命地域 Redesign プロジェクト」に取り組んでいます。これまで、プロジェクトの一環で、

フードドライブの実施、ゼロカーボン推進事業、市役所や支所から離れた地域で暮らす市民に各種行政サービスを提供する「妙高市役所移動窓口号」の運行など、関連の事業を進めてきました。

**荒木** 桐生市では市内に立地した群馬大学理工学部を核に、産学官連携を活発に進め、地域産業の活性化を図ってきました。その成果の一つが、低速電動コミュニティバス「MAYU（まゆ）」の開発です。ガソリンを使わず電気のみで走ること、最高速度が時速19kmのため、安全であることなどから、環境にも人にもやさしいバスであることに加え、座席を対面式にし



ているため、乗客同士のコミュニケーションも促されます。桐生市では、これまで10年以上にわたって市内観光に活用してきたほか、移動手段としての実証実験を重ね、地域実装を進めてきました。この桐生発祥の低速電動コミュニティバスは、今では、本市だけでなく、全国各地で導入されています。

桐生市では、「ゆつくりズムのまち桐生」を宣言し、スロモビリティを活用した環境にやさしいライフスタイルやスローライフ、スローツーリズムの普及などに取り組みんでいます。MAYUは、こうしたSDGsの取り組みを進める上でも欠かせない地域資源です。このMAYUの活用などを通じて「ゆつくりズムのまちづくりを進め、地域課題の解決や持続可能な未来社会の確立を目指しています」。

**石川** 知立市は、近隣の自動車産業関連企業に勤務する外国人が多く転入し、外国人住民の割合は約8%になりました。そうした状況の中、令和3年に「SDGs未来都市」に選定されて



城戸 陽二  
妙高市長(新潟県)

## 「1人の100歩よりも100人の1歩」 を念頭に、市民の協力を得ながら 環境施策を推進しています。

以来、「多文化共生の未来都市知立を目指して」をテーマに、日本人・外国人を問わず、誰一人取り残さない、持続可能なまちづくりを進めてきました。

多文化共生施策を含め、SDGsの取り組み

は多岐にわたることから、知立市では、特定の部署に限らず、庁内横断で施策を進めることを心がけてきました。各部署において、それぞれの施策がSDGsのどの目標と結び付くのかを整理するとともに、持続可能性の観点から、施策の見直し作業も進めました。

また、多文化共生施策では、外国人住民の「言葉の壁」の解消を目指して、日本語教室を開催しているほか、小中学校における外国人児童生徒支援として、早期適応教室の設置、日本語指導助手・通訳翻訳者の配置なども行いました。

**堀江** 上天草市は大小複数の島々から構成される、豊かな自然に恵まれた地域です。こうした地域性を生かし、環境にやさしいまちづくりを進めることで、シビックプライドの醸成を図り、持続可能なまちづくりを推進したい。そうした考えから、令和4年に「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」に選定されたのを機に、海洋環境の維持・再生、観光業の活性化、水産業のDX化などに取り組んできました。

代表的な取り組みの一つが、近海に自生する海草の一種、アマモを活用したブルーカーボン事業です。アマモは多くの魚が産卵し、稚魚が育つ場所として、海の生態系に重要な役割を果たしていることに加え、二酸化炭素の吸収源としても注目されています。そこで、海洋環境の再生を図るとともに、カーボンニュートラルの一環として、民間企業や釣り人など



登録制のボランティア団体「環境サポーターズ」による自然環境保全活動(妙高市)

の協力も得ながら、「アマモ場造成活動」を進めています。

### SDGsの認知向上に向けて

**細川** まちを挙げて取り組みを進める上で、SDGsの認知向上は欠かせないと思いますが、いかがでしょうか。

**城戸** 妙高市でSDGsに関する取り組みを進めるに当たって重視したのが、市民への普及啓発でした。「1人が100歩進むよりも、100人が1歩ずつ進んだ方が目標達成に近く」との考えから、市民向けSDGs啓発



低速電動コミュニティバスの活用を通じて、環境にやさしいライフスタイルの普及などに取り組んでいます。

荒木 恵司  
桐生市長(群馬県)

ブック「みようこう未来BOOK」の作成のほか、SDGsを楽しみながら学べる展示や体験ブースを取りそろえた「みようこうグッドライフフェア〜IKAZUCHI〜」の開催、地域の集会などでの「SDGs出前講座」などを実

施し、市民の行動変容を促してきました。

また、自治会などに対する啓発を目的に、SDGsに関連する取り組みに対して交付金を上乗せする仕組みを設けるなど、インセンティブも考慮しながら、SDGsの普及を図りました。

**石川** 知立市が「SDGs未来都市」に選定されて初めて取り組んだのは、SDGsの理念や考え方を市民や職員と共有することでした。若手職員の発案によるシンポジウムやアイデアコンテストの開催、市職員や学生を対象にSDGsカードゲームを使用したセミナー・研修の実施、友好都市である伊那市の森林の間伐材を有効活用したキーホルダーの作成・配布など、一連の啓発事業を進めました。

**荒木** 市民や大学、企業・団体など、多様なステークホルダーが同じ目標・価値観を共有して、取り組みを進める体制整備も重要です。桐生市では、SDGsに取り組むそれぞれの主体がつながる場として、「桐生市SDGs官民共創プラットフォーム」を創設し、「SDGsパートナー登録制度」や、地域の課題解決につながる提案を民間から募集する「官民共創民間提案制度」を導入しました。

また、子どもたちへの啓発として、「家族と協力し、フードバンクや子ども食堂に食材を寄付する」など、SDGsの達成に資する活動を行った小中学生に対し、地域通貨「桐<sup>きり</sup>ペイ」ポイントを交付する「桐生市SDGs100点チャレンジ」も実施しています。

**堀江** 上天草市でも、SDGsに先進的に取り組んでいる民間企業と連携して、地域の学校を訪問し、SDGsの理解促進に向けた授業を実施するなど、子どもたちへの啓発に力を入れています。

市民を巻き込んだ環境施策

**細川** 行政の啓発事業や教育の一環で、子どもたちにはSDGsという言葉は着実に定着してきたと思いますが、世代によっては、普及の難しさを感じたこともあったのではないのでしょうか。



市内の伝統的な町並みをゆっくりと巡るMAYU。観光客にも好評だ(桐生市)

## 外国人住民の増加を受けて 多文化共生施策を推進。 地域の担い手づくりも視野に 取り組みを強化します。



石川 智子  
知立市長(愛知県)

**城戸** 確かに、シニア世代の皆さんを中心に、SDGsという言葉になじみのない方も少なくありません。しかし、意識していないだけで、SDGsに関する活動を地域で既に行っている方も多そうですね。そうした方々

には、「皆さんは既にSDGsに取り組まれているんですよ」とお伝えすることから、啓発活動を始めてきました。

**堀江** ごみの減量、子どもたちの見守りなど、市民が行う地域活動は、だいたいSDGsにつながっています。そのことは、私どももことあるごとに市民にお話ししています。同時に、出前講座や講演会などを通して、SDGsの理念や考え方もお伝えしてきました。

**石川** 知立市の多文化共生に向けたSDGs施策は、外国人住民の増加に伴う、日常的な地域課題を基にしています。市民にとっても身近な問題ですので、関心は高いと思います。実際、これまでの一連の啓発事業や日本語教室などの具体的な施策を通して、市民のSDGsへの理解も深まっていると感じます。

**荒木** 私としては、MAYUに乗りしてもらうことが何よりの啓発になると考えています。桐生市では週末に市内の観光コースを運行しているほか、地域住民の皆さんが運行設計に携わり、商店や集会所など行きたい場所を調整しながら運行させる実証実験も行っています。桐生市は、群馬県内で最も高齢化率が高いまちですが、こうした取り組みを通して、高齢者を含めた市民の皆さんの社会参加や健康づくり、生きがいづくりなどにつなげていきたい。それがひいては、私たちが提唱する「ゆつくりズム」の浸透にもつながっていくと考えています。

**城戸** 妙高市では啓発事業と並行して、市民



「七五三」では、外国人の子どもたちを対象に着物の着付け体験を実施(知立市)

の協力を得ながら、地域の環境負荷の軽減を図る施策も進めています。その一例として、家庭で発生した生ごみの堆肥化なども促しながら、可燃ごみの収集回数を、週3回から2回にあえて減らす取り組みも推進しました。反対の声が上がらなかつたわけではありませんが、環境にやさしい取り組みを市民と協働して着実に進めることは非常に大切なことだと考えています。

**石川** 知立市では、ごみ減量の一環で、着なくなった衣類のリサイクルボックスを、公共施設はもちろん、民間のドラッグストアやスー



堀江 隆臣  
上天草市長(熊本県)

SDGsの取り組みを  
持続的なものにするためにも、  
今後は活動の収益化を  
図っていくことも必要です。

パーを含めて、市内各所に設置する事業を始めたところ、多くの衣類が集まりました。市民のリサイクル・リユースの意識やニーズの高まりを感じているところです。  
**荒木** 桐生市は繊維のまちという土地柄もあ

るのか、民間の古着ショップも増えていて、市の目抜き通りでは9軒が営業しています。土日は中高生で大いになぎわっていますよ。  
**堀江** ごみ処理に要する費用は、市民が想像する以上に高額です。本市としても、市民の協力を得ながら、ごみや食品ロスの削減に取り組んでいます。

### 活動の持続性に課題

**細川** SDGsの取り組みを進める中で、現在、どんな課題が出てきていますか。

**堀江** SDGsの取り組みは、市民や企業・団体によるボランティア活動が主体です。しかし、活動に従事される方々の高齢化も進んでいるほか、財政状況も厳しい中で、行政が捻出できる費用も限られています。そうした事情を考えると、活動の継続に向けて、今後はSDGsに関する取り組みもビジネスとして成立するよう、収益化を図っていくことも必要だと感じています。

例えば、アマモ場造成活動に関しても、それが収入につながったり、活動の結果、地域の水産物の価値が向上し、水産業の活性化につながったりすれば、活動の継続はもちろん、取り組みはさらに活発化すると思います。

**石川** 知立市では、多文化共生に関する日本語教室を実施するに当たり、安定した財源を確保し、かつ、活動が持続可能なものとなるような仕組みをいかにつくるか、大きな課題だと感じています。



アマモ場造成活動の様子。釣り人たちが協力してアマモの花枝を採取した(上天草市)

**城戸** 自然環境の保護など、環境施策の展開は、まちの魅力を高める効果も生み出します。人口減少が進み、定住人口だけではまちづくりが成り立っていない時代がきている中で、地域の持続可能性を高めるためにも、SDGsの取り組みをさらに推進して、関係人口など、市外からまちを支える人たちを増やしていくことも重要です。

ただし、自然環境の保護活動は、多額の資金を要します。そうした中で、われわれ行政も、活動に従事されるボランティアの存在に頼らざるを得ない面があるのも事実です。活

動が無理なく継続できるよう、ゆくゆくは環境保護と経済的利益が両立できる仕組みを考えていく必要があると思います。

**荒木** 桐生市内には170軒ものノコギリ屋根工場があります。繊維のまち桐生を象徴する産業遺産です。かつて繊維産地ではよく見られた光景ですが、全国的に数が少なくなっている中で、貴重な観光資源にもなっています。

近年、市内では役目を終えたノコギリ屋根工場を、ブティックやパン屋さん、レストラ



ンなどにリノベーションして、まちのにぎわい創出に貢献している事例が増えています。持続可能なまちをつくるためにも、自然環境に限らず、こうしたまちの活性化につながる地域資源の保存・活用も、非常に重要になっていると思います。

### 教育がまちの持続可能性を高める

**堀江** 私はまちの持続的発展を図るには、子どもたちへの教育が不可欠だと感じています。市内には高校もありますが、都市部との教育格差を背景に、中学校卒業時点で地域を離れ、都市部の高校に入学する生徒も少なくありません。教育格差の解消に向けて、地元の高校に公設塾を設けて、オンライン講座を開いたり、英語教育の充実に向けてA L Tを増やすなどの対策を進めています。地域の特徴を学べるカリキュラムの導入など、さらなるてこ入れも必要ですが、こうした取り組みを通じて、地元の高校の魅力高めると同時に、それぞれの生徒が地域への愛着を深めることで、将来的にまちの担い手として活躍する人が一人でも増えてほしいと考えています。

**荒木** 桐生市では、子どもに地域への誇りを持つってもらうため、子ども自身が観光ガイド役を務め、地域の歴史、文化などを観光客に伝える「子ども観光ガイド養成講座」を実施しています。参加する子どもたちには、地域の文化などを深く学び、郷土愛を育んでもらうとともに、自分たちでよりよいまちをつくる



ていきたいという「自治意識」も高めてもらいたいと考えています。

**城戸** 妙高市では、こども園・保育園にもA L Tを派遣するなど、早期から英語教育を進めています。また、小学校の修学旅行では台湾を訪問するほか、中学生になると、友好都市であるスイスのツェルマット市の中学生と交流する事業も行っています。このような取り組みを進める中で、子どもたちの可能性は世界に広がってきました。そのこと自体は、喜ばしいことで

すが、逆にこうした取り組みが子どもたちの流出を招いてしまう側面もあるのではないかと。そこにジレンマを感じています。

**石川** 知立市では、多文化共生の取り組みが定着してきたことから、今後は、外国人支援から、地域の担い手づくりという、新たな段階にシフトしていくと考えています。具体的には、日本語教育にとどまらず、学校卒業後、地域で生活し、働くことも見据えたキャリア教育などにも力を入れていきます。

### 今後の展望

**細川** あと4年で、SDGsがターゲットとして2030年を迎えます。その点も踏まえて、今後の展望をお聞かせください。

**荒木** 桐生市が「ゆつくりズム」を提唱した原点にあるのが、1970年代に、地球環境の面から人間の社会経済活動に対して警鐘を鳴らしたローマクラブの報告書「成長の限界」です。将来にわたり持続可能な都市を目指し、



細川 珠生  
政治ジャーナリスト

SDGsの取り組みを進めていくためにも、なぜ、スピードやモノの豊かさを重視する社会から、ゆとりあるライフスタイルや心の豊かさを重視する社会へと転換を図らなければいけないのか。その原点を市民と広く共有することも必要だと感じています。

**石川** その意味では、やはり啓発活動は重要ですね。先ほど申し上げたように、今後、知立市では多文化共生の取り組みをさらに加速させて、地域の担い手づくりにも力を入れていく方針ですが、その一方で、改めて啓発の取り組みを継続する必要があると感じたところです。

**堀江** 将来のまちの行く末を考えると、人口減少の進展はある程度、受け止めなければいけないでしょう。その一方で、市のまちづくりにも関わっていただける交流・関係人口をいかに増やしていくか。持続可能な地域として存続していくためには、そこが大きなポイントだと考えています。地域のファンづくりの一環として、海洋環境の再生など、SDGsの取り組みをこれからも継続していきたいと思っています。

**城戸** 妙高市は、市内のスキーリゾート地を中心に、外国人旅行者や居住者が増加しています。さらに、今年から大規模なリゾート建設も始まるため、その傾向はさらに強まるでしょう。私たちの原点である「生命地域」の考え方に立脚したSDGs施策を着実に進めながら、本市でも多文化共生に力を入れていきたいと考えています。



**細川** 各市ともSDGsを一つの切り口としてうまく活用しながら、持続可能なまちづくりや地域活性化、次世代の育成など、地域の課題解決に向けた取り組みを活発に進めていってほしいことが分かりました。今後も、SDGsの理念に賛同する市民や企業、団体と協働しながら、経済・社会・環境の3側面に総合的に取り組み、地域の発展につなげていただきたいと思っています。本日はありがとうございます。

(令和8年4月7日、全国都市会館にて開催)  
本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。